

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 山本 真実

論 文 題 目

療育教室に通う子どもと母親のコミュニケーションの有り様と
対話を通じた看護活動

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	梶田 悦子
	名古屋大学教授	藤本 悦子
	名古屋大学教授	浅野 みどり

別紙 1-2

論文審査の結果の要旨

子どもと母親のコミュニケーションは、親子のシステムのなかで変化し続けるダイナミックな側面をもつ。コミュニケーションの困難さを抱え療育教室に通う母子の代表例の一つに自閉症スペクトラム障がい（以下、ASD）がある。ASD の母子コミュニケーションにおいて、子どもと母親の双方を視野に入れ、やりとりに生じる意味やその変化、関係性の変化、コンテキストを含めた検討、診断の有無に捉われず、家族が抱える生活上の困難さに注目して日常生活の母子のコミュニケーションを検討することが大きな課題である。

本研究の目的は、①母子、家族そして研究者を含む周囲の人々との対話のなかで、親子のコミュニケーションにおいて関係性や意味がつくられていく動きを中心に、親子のコミュニケーションを詳細に記述すること、②療育教室に通う親子のコミュニケーションについて、対話を通した看護活動における理解の仕方とその意義を示し示唆を得ることである。

本研究では、相互作用やコミュニケーションを探究すること、対話そのものが探究の対象となることから、社会構成主義の立場にたつ **Narrative interview** と **fieldwork** を用い、質的記述的研究を行った。データ分析では、母子のコミュニケーションのコンテキストの変化に注目し、また、研究者の理解の変化も含めて分析を進め、事例ごとの記述と分析を重ねて療育教室に通う親子のコミュニケーションのありようを提示した。

本論文の新知見および意義は、以下の通りに要約できる。

1) 療育教室に通う親子 7 組の母子のコミュニケーションは、それぞれのテーマを中心とした事象レベルでのユニークさがあり、その一方で、子ども、母親、看護者（研究者）との対話のなかで、新たなコンテキストをつくり続けていくという“しなやかさ”をもっていた。“しなやかさ”は事象としてのユニークさだけではなく、コンテキストの変化のありようや、親子と看護者（研究者）との関係性までを含めユニークであり、対話のなかでその意味は変化していた。また、看護者との対話のなかで、「親子が何を大切にしたいのか？」を問いながら、その親子の“つながり”のコンテキストを探し、それを変え続けていた。療育教室に通う親子のコミュニケーションは、「ASD／個性」「障がい／普通」に代表される“相反するコンテキスト”の間で葛藤し、親子として何を大切にするかを探し続ける“しなやかさ”をもつ。“しなやかさ”を理解し、対話を重ねることによって、親子が求める意味を親子自らが見つけ、その親子だけのつながりをつくっていた。

2) 母子のコミュニケーションを“しなやかさ”として理解することは、その母子のコミュニケーションのユニークさを母親と看護者が改めて気づく機会をつくる。その気づきにより、これまでの知識や経験だけではなく、対話を続け、その母子のユニークな意味を探そうとする知り方を母親と看護者に与える。この親子のコミュニケーションがもつ“しなやかさ”の理解により、看護者自身の知り方も変化しているというスタンスで、変化し続ける“母子が大切にしたいこと”を共有しながら看護活動を行うことができると考える。

以上より、本研究は博士(看護学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。